

インタビュー

作家と Lunch ～創作のひみつを探る～ ②

内田麟太郎

(聞き手) 編集部



—— 作家とお昼ご飯をご一緒しながら、創作の舞台裏についてお聞きするという企画の二回目。本日(二〇二二、一一、一六)は、詩人・絵詞(えことば)作家の内田麟太郎さんに来ていただきました。

今回のランチは、東京、J R立川駅の駅ナカでお弁当を買い、歩いて国営昭和記念公園へ。天気は快晴。公園内は紅葉が美しく、遠足にきた気分です。初冬にもかかわらずぽかぽかと暖かい日で、内田さんおすすめのもの、おさかな処築地 奈可嶋の「ふわとろ穴子鮪」をいただきながら、広場に座ってお話を伺います。あつ、この穴子、おいしい。このお弁当はよく買われるんですか。

内田 立川で打ち合わせが多いからね。帰りに買って家で食べます。

—— 昭和記念公園にはよく来られるんですか。

内田 今は年に二回ぐらいかな。奥さんと。孫が小学生の時ね、月に一、二回は来てたけど。

児童文学作家になったきっかけ

—— 内田さんは一九七七年、三六歳の時、駅で看板作業中にはしごごと転倒され、腰椎圧迫骨折の大けがをされたということですが。

内田 見てたの？

—— いえ、見てません(笑)。それで、看板職人として